

シリーズ「遺跡を学ぶ」

147

巨大古墳の 時代を解く鍵

黒姫山古墳

橋本達也

新泉社



巨大古墳の 時代を解く鍵 ―黒姫山古墳―

橋本達也

〔目次〕

第1章 黒姫山古墳とは……………4

- 1 巨大古墳の時代を解く鍵……………4
- 2 発掘、黒姫山古墳……………7

第2章 解明された黒姫山古墳……………13

- 1 黒姫山古墳の構造……………13
- 2 前方部石室と武装具埋納……………22

第3章 最多の古墳出土甲冑……………29

- 1 「甲冑の世紀」、その重要性……………29
- 2 短甲の型式……………33
- 3 衝角付冑と盾庇付冑……………43
- 4 甲冑の付属具……………47
- 5 出土甲冑の性格と特質……………48

第4章 埴輪列と埴輪……………53

- 1 円筒埴輪列と型式……………53
- 2 形象埴輪群……………59

第5章 黒姫山古墳の被葬者像……………64

- 1 年代と被葬者の性格をさぐる……………64
- 2 「倭の五王」と巨大古墳と黒姫山古墳……………68
- 3 勢力基盤としての丹比野……………73

第6章 黒姫山古墳周辺をめぐる……………76

- 1 古代丹比野の開発……………76
- 2 河内鑄物師と中世的景観……………84
- 3 現代に語りかけるもの……………89

- 主要参考文献……………92

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 黒姫山古墳とは

1 巨大古墳の時代を解く鍵

さえないものがない田んぼのひろがりのなかに、ぼつこりと浮かびあがる深緑の木々におおわれた小さな山、昭和が終わるころまでは一見何でもないような風景が大阪南部の平地にあった。いまでは周囲の開発も進んだこの小さな山が黒姫山古墳である(図1)。

三世紀半ばから七世紀初頭までの三五〇年ほどつづいた、前方後円墳を中心とする古墳の築造が社会のさまざまな関係を規定した古墳時代。そのなかでも西暦四〇〇年代を中心とする古墳時代中期は日本列島の各地域で最大級の古墳を築いた時代として知られる。この時代に大阪平野では古市古墳群、百舌鳥古墳群に巨大な前方後円墳が築造された。世界的にも傑出した威容を誇る両古墳群の主要古墳は二〇一九年には世界文化遺産に登録された。

黒姫山古墳は、大阪府堺市美原区黒山に所在し、古市古墳群の誉田御廟山古墳(応神陵古

墳)までは東に五キロ、百舌鳥古墳群の大仙陵古墳(仁徳陵古墳)までは西へ六・七キロという、両大古墳群の中間地点に孤高の雄姿をみせている(図2)。

両古墳群の巨大古墳とくらべれば大型ではないが、数少ない発掘調査によって古墳の構造、埋葬施設、出土資料の判明している同時期の古墳である。世界文化遺産の構成資産には含まれていないが、両古墳群の大型古墳群の実態を理解するうえで欠かせない存在である。

一九四七年一二月、黒姫山古墳で発掘調査がおこなわれた。この調査では前方部墳頂に築かれた石室内から二四セットのものぼる甲冑が出土した。この甲冑の出土数は、全国で数多くの古墳の発掘調査がおこなわれてきた現在にあっても匹敵するものがない。また、良好な埴輪列



図1・黒姫山古墳

大阪平野南部、堺市美原区黒山に所在する。市街地化が進み見通しが悪くなったが、少し高く上がれば六甲山から淡路島と大阪湾も望める距離と地形である。かつては3階建ての小学校の屋上からでも百舌鳥古墳群の大仙陵古墳が望めた。

の検出も古墳の実態を説明するうえで画期的な成果であった。

先に結論的に述べれば、黒姫山古墳は五世紀代の古墳時代中期、まさに古市・百舌鳥古墳群に営まれた巨大前方後円墳と同時期のものであり、「倭の五王の時代」に生き、活躍した人物が埋葬されたとみてまちがいない。

とくに、この時代の甲冑は、巨大古墳被葬者たちを中心とする近畿中央政権を象徴する政治性をもった器物と考えられ、その保有は中央政権との関係、地位や身分などの表示に関係するものと考えられる。黒姫山古墳での二四領の出土は、この時代の中央政権、倭国の政治的権威を象徴するものなのである。

よく知られるように古市・百舌鳥古墳群の大型古墳は宮内庁によって天皇陵に治定され、実態の解明にはかなり遠い状況にある。黒姫山古墳は発掘調査がおこなわれ、古墳の実態に関する多くの情報を提供してくれている、巨大古墳を知るうえでの基準資料なのである。

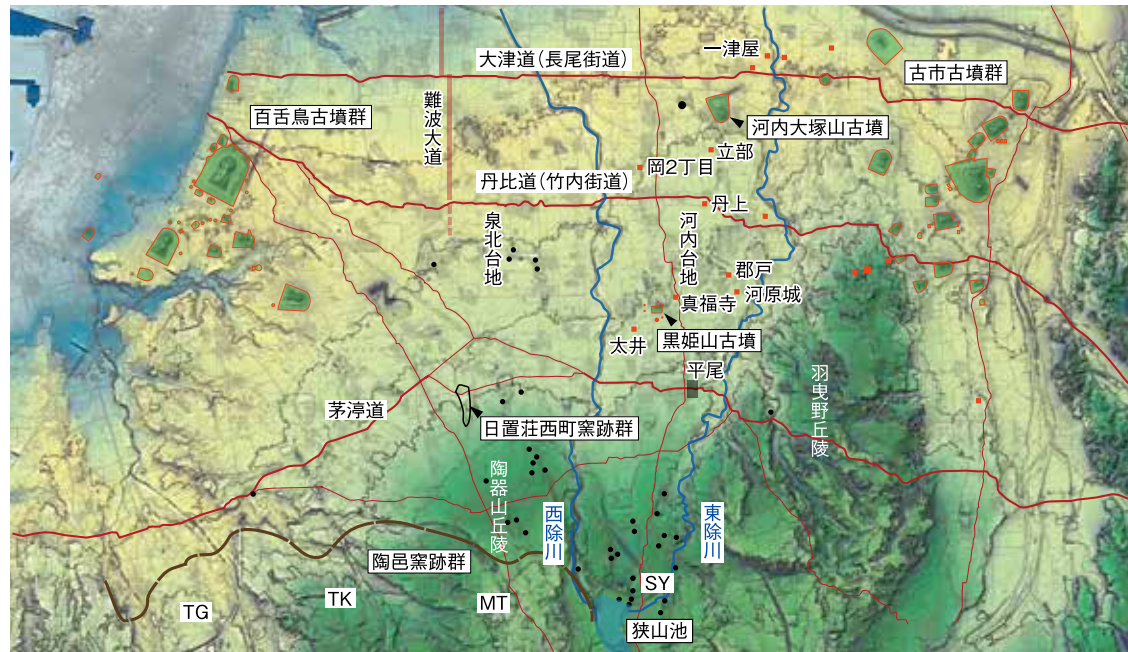
2 発掘、黒姫山古墳

戦後、森浩一氏らによる発掘調査

黒姫山古墳、この名前は、その考古学的な重要性の割には一般には必ずしも知名度が高いとはいえないだろう。最大の成果となった発掘調査は一九四七〜四八年という敗戦後の混乱期のなかでおこなわれた。当然、物資も不足し、十分な調査体制がとれる状況にはなく、また考古学の成果が話題になることも少ない時代であった。

この古墳はもともとクロマツでおおわれており、そのために戦時中に松根油しょうこんあぶらを採るために墳丘が掘り返された。結果、前方部墳頂で石室が露出するに至った。そして、一九四五年五月五日、古墳の南東にある集落でこの石室から持ち出された鉄製甲冑があることに、周辺を踏査で訪れていた森浩一氏が気づいた。このあたりの経緯については森氏の著書『僕は考古学に鍛えられた』にくわしく描写されている。

そして、一九四七年一月二二日から翌四八年一月七日まで、末永雅雄氏が大阪府から調査を委託され、森氏を現地担当とする発掘調査が実施された。第一次調査では前方部石室から調



■古墳 TG、TK、M、SYは陶器山丘陵の地区名 ●陶器外の須恵器窯 赤線は古道

図2・丹比野の歴史的環境地図

黒姫山古墳のある河内台地を中心とする地域は歴史上にタジヒ（丹比・多治比）とよばれた地域である。古市・百舌鳥古墳群の中間に位置し、交通の要衝でもあった。黒姫山古墳以前の遺跡がきわめて少なく、5世紀中葉以降に本格的な開発がはじまったと考えられる。

黒姫山古墳は、その後にも数次の調査がおこなわれている(表1)。一九七七年には、嶋田曉^{しまたあきひろ}氏を主担当として周庭帯^{しゅうていおび}の確認のための発掘調査がおこなわれた。また、一九八八年には高速道路・阪和道の側道部調査にもなって周庭帯の南東部をかすめる位置の発掘調査がおこなわれた。さらに、一九九〇年に

その後の発掘調査と史跡整備

この調査の報告書は、一九五三年に大阪府文化財調査報告書の第1冊として刊行された、戦後、大阪府が刊行した文化財調査報告書のなかの記念碑的な存在である(図4)。本書でもこの報告書を主たる典拠として黒姫山古墳の姿をみていく。

この報告書に掲載された墳丘図は(図5)、その後、近藤義郎氏らの『考古学の基本技術』や西谷真治氏が記述した『図解考古学辞典』の「測量」の項目といった調査技術の解説において、前方後円墳の墳丘測量の手法として引用されている。また、甲冑の実測図も長く、その手本として利用された。この調査および報告が高い問題意識に支えられた良質な研究に裏づけられていたことの証であろう。

『河内黒姫山古墳の研究』



図4 ● 『河内黒姫山古墳の研究』
1953年刊行、戦後の大阪府文化財調査報告書の第1冊。



調査を開始し、埴輪列、墳丘調査がおこなわれた(図3)。つづいて一九四八年二月二三日から翌四九年一月七日までの第二次調査では、墳頂の上段埴輪列、後円部墳頂の方形埴輪区画、後円部主体部および墳丘測量の仕上げがおこなわれている。森氏は当時、一九〇二〇歳である。



図3 ● 第1次調査
上：黒姫山古墳第1次調査、前方部石室での記念写真(米谷晃一氏撮影、宮川彦氏提供)。下：調査のニュースは新聞に小さく掲載されたのみであった(1948年1月18日、朝日新聞大阪地方版)。

は美原町教育委員会が史跡整備事業として、前方部石室の再発掘とその周辺の埴輪列の調査、主軸付近の後円部・前方部の墳丘斜面のトレンチ調査、墳丘裾部の発掘調査をおこない、あらためてこの古墳の実態を確認している。

なお、墳丘および周溝は一九五七年に国指定史跡になり、一九七八年には周庭帯部分が史跡に追加指定され、一九九〇年代には周辺が史跡公園として整備され現在に至っている。

黒姫山古墳の記録と名称について

まずは黒姫山古墳に関わる記録を確認しておこう。現在は遺跡や国指定史跡としての名称は黒姫山古墳であるが、地籍上は大字黒山字黒姫塚で、地元では一九八〇年ごろまで「墓山」や「黒姫塚」とよばれることが多かった。

黒姫山古墳に関するもっとも古い記録は、一六七九年（延宝七）の『河内鑑名所記』で、ここでは「天武天皇御廟所」と記録されている。少なくとも、この時期以前から、地元で高貴な人物の墓だと認識されていたことになる。つづく一六九九年（元禄一二）『諸陵周垣成就記』およびそれ以後の江戸時代の記録では仁賢天皇陵とするものが多い（図6）。また一八七五年（明治八）には明治政府によって、仁賢天皇の皇后・春日大娘皇女陵に治定されたが、その後一八七九年（明治一二）には性急な治定に誤りがあったとして取り消しになり、以後は国有地として現在に至る。

天皇陵としての名称以外では、一八〇一年（享和元）の『河内名所図会』に「荒陵」、別名「墓山」との名がみえ、墓山がより古くからの名称とみられる。黒姫山が正式な名称となるのは、『河内黒姫山古墳の研究』以後である。ここで黒姫山を採用したのは、古市古墳群中の墓山古墳と同名なるのを避けたためで、研究上の便宜を優先したものであった。「黒姫山」の名称は記録にも地元での呼称にもみあたらない、新しくつけられたものである。

「黒姫」の名称は明治の陵墓治定の際に、履中天皇后妃である黒媛

表1・黒姫山古墳発掘調査の経過

調査次	調査年度	調査箇所	調査主体	主担当
1次	1947年	前方部石室・前方部埴輪列・墳丘測量	大阪府	末永雅雄・森浩一
2次	1948年	後円部埋葬施設・後円部埴輪列・前方部埴輪列・造り出しトレンチ・墳丘測量	大阪府	末永雅雄・森浩一
3次	1977年	周庭帯（周溝西外側）	美原町	嶋田暁・宮川彦・庖丁道明
4次	1988年	周溝南東外側	美原町	泉谷博幸
5次	1990年	前方部石室・前方部墳頂・墳丘主軸トレンチ・周濠内	美原町	泉谷博幸

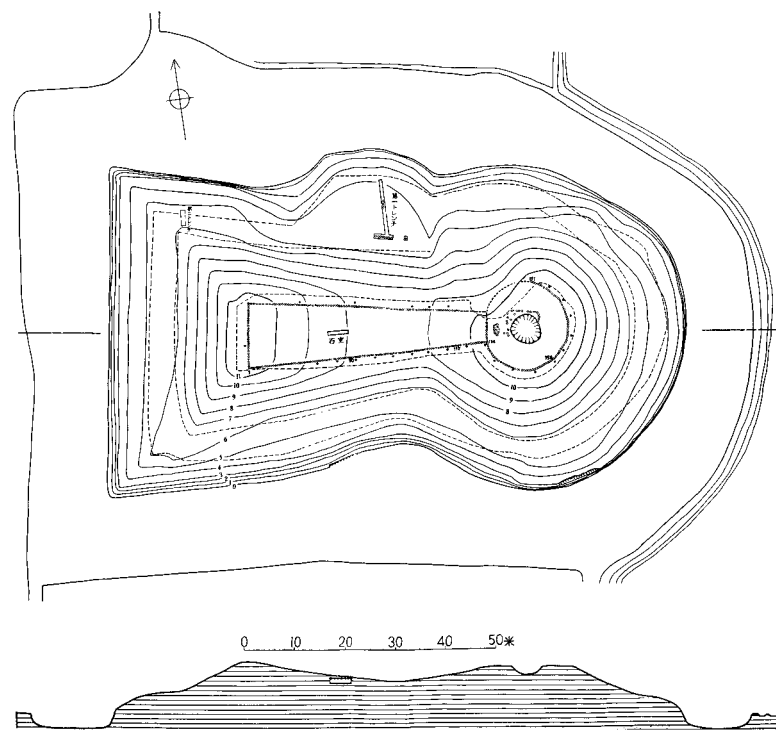


図5・『河内黒姫山古墳の研究』掲載の墳丘図

が被葬者候補にもあげられたことが関係するのかもしれないが、むしろ黒媛が被葬者候補になったのは地名が黒山であったことに由来する根拠の弱いもののようにも思われる。

その黒山の地名は一〇世紀、平安時代の『和名類聚抄』や『延喜式』にも河内国丹比郡黒山郷としてみえ、早くは『日本書紀』の孝徳朝の記事にも登場する。すくなくとも八世紀初頭の『日本書紀』編纂段階までにはその名称で通っていたとみられる。そして、この黒山郷はおおむね平坦な台地上にあり、丘陵地域は含まず、「山」とよべる場所は黒姫山古墳をおいてほかにない。平坦地に浮き上がるランドマーク、この古墳の存在から「黒山」との名称が生じた可能性は十分に考えられる。

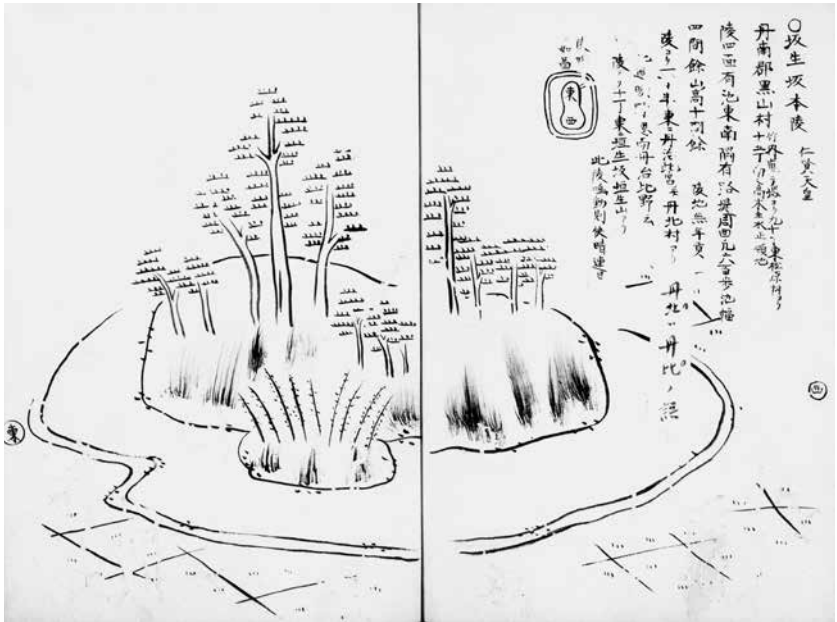


図6・伴林光平『河内国陵墓図』にみえる黒姫山古墳

幕末・河内の国学者、伴林光平が現地調査をおこなって作図したものと考えられる。北側からみた図で、墳丘の中央に造り出しを描き、左側が後円部である。この時期には仁賢天皇陵として調査・記録されている。1841年刊行。